

真偽疑問文に対する否定応答の分類

— 「いいえ」の有無と話し手の意図を基準として—

吉 田 吏 沙

1. はじめに

日本語教育では、肯定否定を尋ねる質問文（以下、真偽疑問文）に対する応答として、(1) (2) のように「はい」や「いいえ」の応答詞に「述語の繰り返し／そうです／そうじゃないです」などの形式を一般に応答表現として提示する。

- (1) たばこを 吸いますか。
…はい、吸います／いいえ、吸いません。
- (2) それは ノートですか。
…いいえ、そうじゃありません。手帳です。

『みんなの日本語初級 I 本冊』

しかし、実際の母語話者会話では、このような応答をする時もあるれば、他の応答方法もあると考えられる。「はい」「うん」などの肯定応答詞に関して言えば、応答詞だけでも会話の中でよく使うことがあるが、否定応答詞に関しては、そのようではない。また、サフト、大原(1999)では、「日本語の話者が実際の談話で使用する否定的返答の仕方と、外国語としての日本語教育で示される否定的返答の仕方に隔たりがある」(p225)と指摘していることから教育現場と実際とは異なっていることが分かる。談話展開や断りなどが注目される一方で、初級段階で取り扱う真偽疑問文に対する否定応答の研究はほとんど見られない。そこで、本調査では日本語母語話者の会話資料を用いて調査し、否定応答形式の使用実態を明らかにするとともに、応答形式の使われ方を分析する。

2. 先行研究

サフト、大原(1999)では、疑問と叙述に対する否定的返答の研究をしており、「いろいろな場面での文化的に適切な否定的返答の仕方を教えるべきである」「早い時期に教えれば教えるほど学習者が無作法、もしくは知識を欠くという印象を与えることを防ぐことになる」「否定的返答について「いいえ、違います」「そうじゃありません」という文型を教えるだけでは、不十分である」(p224)と述べている。否定応答の研究が少ない中で意義のある論文ではあるものの、問題点としてデータの数が少なく、否定応答形式の分類に対する具体

的説明がなく曖昧なことから、改めて、疑問文に対する否定応答の分類をする必要があると考えられる。

また、真偽疑問文に対する肯定応答形式の分類と使われ方を明らかにした研究に大浜(2004)が挙げられる。ここでは、真偽疑問文の応答には「応答詞だけの応答」、「応答詞のない応答」、「応答詞を伴う応答」の3タイプがあり、肯定応答では「応答詞のない応答」が最も高い割合で出現することが分かっている。また、各応答形式については、先行する真偽疑問文に着目し、どのような文脈で真偽疑問文が現れるかということ进行分析している。大浜(2004)の3形式の分析は次のようである。

「はい」だけの応答は、前の段階で、真偽疑問文の命題内容が真であることが直接的・間接的に示されている場合に、(3)のように確認の意味で使用される。

(3) 店員：じゃ、手提げ袋の方おつけしときませうか？

客：あ、いいです。

店員：いいですか？

客：はい。

((3)～(6)は(大浜2004)、下線部は(大浜2004)による)

「はい」のない応答では、会話の冒頭、目下の話題が続かなくなった後に新しい話題を導入する時や、(4)のように同一の話題で会話の展開を新しい局面に誘導する時に使われる。

(4) 〈新聞の勧誘で物をもらったことがないというAに対して〉

B：えー、もったいない、私、電卓もらって、電卓、ちょっと見る？電卓

A：見る。

この形式は、応答者が真偽疑問文の命題内容について、それ以前に思考することも発話することもなく、質問された時点で初めて思考するような真偽疑問文に対して使われやすい。

「はい」を伴う応答では、応答者が意識的・無意識的に言いたいと思っていることを質問者が代わりに真偽疑問文で述べ、応答者に確認したり、同意を求める時に使われる。

(5) 1 A：Y先生の授業が大講(大浜注：大講義室)、大講じゃないか、102？

2 B：知らないよ、なんで私//が

3 A：あそこよあそこ、1階のおっきな所ね

4 B：104?

5 A：うん、104

また、このタイプのもう1つの特徴として、「はい」のない応答をすると、相手に「この件については初めて考えた」という印象を与える可能性があるため、そのような印象を与えないようにするために、「はい」という応答詞が使用されていた。

(6) 客：すいません、こっつて持って来たのを丈直して頂けるんですか？

店員：はい、できますよ

以上の大浜(2004)を参考に、真偽疑問文に対する否定応答形式を「応答詞だけの応答」「応答詞のない応答」「応答詞を伴う応答」の3形式に分類し、その使用実態を明らかにする。

また、否定応答のそれぞれの形式と用法を述べる。

3. 調査方法

本調査では、6つの会話資料を観察する。「聞き手に命題の真偽判定を求める」といえる文は真偽疑問文として取り上げ、それに対する応答表現で否定的な応答をしているものを考察対象とする¹⁾。否定応答の判断は資料を読みながら、調査者が行った。これらの資料を選んだ理由としては、登場人物の関係や性別、職種、場面設定が明確であり、会話に立ち会っていない第三者が読んでも状況が分かりやすかったためである。使用した会話資料は以下のようである。

- ①現代日本語研究会『女性のことば—職場編—』（約9時間、1993年9月～11月）（以下「女職場」）…職場で働く女性とその周囲の発話が取録された会話コーパス。これには男性の発話も含まれており、複数人の発話が含まれている場面もある。会話場面は会議、打ち合わせなどのフォーマルな場面と、雑談などのインフォーマルな場面がある。
- ②現代日本語研究会『男性のことば—職場編—』（約12時間、1999年10～2000年12月）（以下「男職場」）…『女性のことば—職場編—』の男性版で、女性の発話も含まれている。場面は『女性のことば—職場編—』と同様。
- ③井出祥子『主婦の一週間』（録音時間計約10時間、1982年8月）（以下「主婦」）…サラリーマン家庭の一人の主婦を中心として、その周囲の人々との会話を一週間録音したもの。接触人物は女性が多い。資料の表記はカタカナ表記となっている。
- ④北九州市立大学上村研究室『コーパス・サンプル』（13.5時間、1996年5月～1996年7月）（以下「コーパス」）…北九州市立大学上村研究室により行われた日本語母語話者の会話データ。
学生および学外の社会人の男女54名を対象としたインタビュー形式の会話。構成は、会話（経歴、趣味、バイトなど）、ロールプレイ部分（留守電を残す、引っ越し後の近所の挨拶、アルバイトの面接など）、また会話モードに戻ってインタビュー終了となっている。
- ⑤ポリリー・ザトラウスキー『日本語の勧誘の談話資料』（25時間、1993年）（以下、「談話」）…社会人の間で交わされた電話による勧誘の電話。会話者の多くは親しい間柄の女性同士だが、セールレディとの丁寧度の高い疎の会話や男性同士の会話もある。内容はお茶、旅行、セールスなどの勧誘に対する「断り」「曖昧な応答」「承諾」である。
- ⑥『筑波大学砂川研究室話し言葉コーパス』（1997～2004年）（以下「筑波大」）…筑波大学砂川研究室により作成された会話コーパス。会話者の中心は学生が多いが、先輩後輩の上下関係がある。会話内容は、自由会話、サークルのミーティング、ストーリーテリング、テーマ会話、など場面別の会話が取録されている。非母語話者会話もあるが今回はそれを取り除いた。

4. 分類方法と調査結果

調査の結果²⁾、真偽疑問文に対する否定応答表現の出現数は595例で、それを「「いいえ」のみの応答」(Ⅰ類)、「「いいえ」を伴う応答」(Ⅱ類)、「「いいえ」のない応答」(Ⅲ類)の形3式に分けた。なお、ここでの「いいえ」は「いえ、いや、ううん」などの否定応答詞も含む。

(7) 「いいえ」のみの応答 (Ⅰ)

F 毎日あそこ頼むんですか↑

A ううん。 (Ⅰ類 女職場)

(8) 「いいえ」を伴う応答 (Ⅱ)

1 : あ、白石さんですか。(2 : はい) 白石さんは、ええと、お仕事一、をしてらっしゃる、んですか?

2 : あ、いえ、今はあの、仕事はしてないんー、です。 (Ⅱ類 コーバス)

(9) 「いいえ」のない応答 (Ⅲ)

A バナナワニ園、行った↑

B 行っていない。 (Ⅲ類 女職場)

【表1】全体の否定の応答形式タイプ別出現数とその割合

	出現数	割合
「いいえ」のみの応答 (Ⅰ)	18	3.0%
「いいえ」を伴う応答 (Ⅱ)	227	38.2%
「いいえ」のない応答 (Ⅲ)	350	58.8%
合計	595	100.0%

【表1】からわかるように、最も少ないのは、「「いいえ」のみの応答」で、日本語の教科書で一般的に教えられる形式の「「いいえ」を伴う応答」は4割にも満たなかった。最も多かったのは、「「いいえ」のない応答」で6割近くもあった。この「応答詞のない応答」に関しては【表2】大浜(2004)の肯定応答も58.8%と同じ割合であった。

【表2】資料別に見た肯定の応答形式タイプ別出現数とその割合³⁾

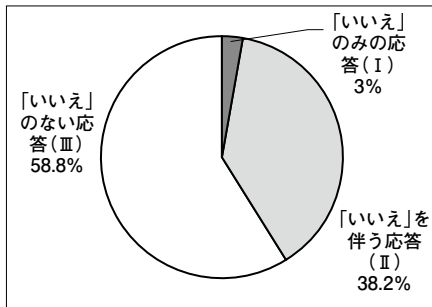
	資料1 (%)	資料2 (%)	資料3 (%)	資料4 (%)
真偽疑問文の数	334 (100.1)	139 (100.1)	112 (100.0)	585 (100.0)
「はい」のみの応答	62 (18.6)	49 (35.3)	34 (30.4)	145 (25.8)
「はい」を伴う応答	46 (13.8)	24 (17.3)	26 (23.2)	96 (16.4)
「はい」のない応答	226 (37.7)	66 (47.5)	52 (46.4)	344 (58.8)

大浜 (2004)

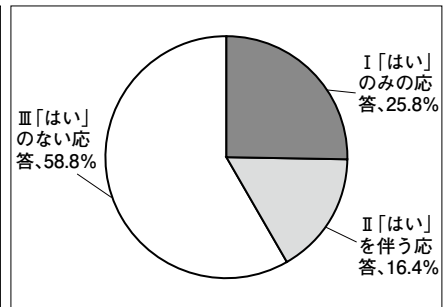
しかし、大浜（2004）では「はい」を伴う応答が16.4%、「はい」のみの応答が25.8%で、それに比べ、「いいえ」を伴う応答は38.2%、「いいえ」のみの応答は3.0%だった。ともに応答詞のない応答は肯定応答でも否定応答でもそれぞれ全体の6割を占めているが、「応答詞のみの応答」「応答詞を伴う応答」ではそれぞれ逆転している。ここに、真偽疑問文に対する肯定応答と否定応答の大きな違いがみられる。

次に【図1】【図2】で応答詞のあるⅠ類・Ⅱ類と、応答詞のないⅢ類を比べてみると、肯定応答否定応答ともに4対6の割合となっている。このように、肯定・否定の両方で応答詞のないタイプ（Ⅲ）が多いということは、真偽疑問文に対する応答形式は、かならずしも応答詞を使用しなければならないということはなく、むしろ、日本語母語話者は、応答詞のない応答形式のほうを好んで使っていることがわかる。

【図1】 否定応答詞3分類 出現率グラフ



【図2】 肯定応答詞3分類 出現率グラフ



（【図1・2】筆者作）

5. 考察

以上の結果から、各応答形式に対応する真偽疑問文に注目し、かつ応答命題への導き方にも触れつつ分析を試みる。

5. 1 Ⅰ類：「いいえ」のみの応答

3形式の中で最も少ないのがこの応答であった。奥津（1989）では、応答詞のみの応答は「応答詞だけでも誤用ではないが、なにかぶっきらぼうな感じを与える不十分な応答」とあったが、これは応答詞という決まり切った形で、無機的だからだと考えられる。質問者に対して否定で応答するということは、お互いの関係を良好に保とうと考えるならば、配慮ある応答を選ばなければならないが、断るうえに「いいえ」のみだと質問者への配慮が感じられない応答になる。本調査資料からは、初対面のインタビュー形式の会話資料『コーパス・サンプル』には1例もなかったことから分かるように、親しくない相手に対しては、「いいえ」のみの応答は使われにくいと考えられる。一方で、丁寧体であってもリラックスして話して

いる雰囲気であったり、文体自体がくだけていることから考えると、この形式のほとんどは、ある程度親しい間柄で使用されていることがわかる。

(10) C: え、けど、ツアーで行ったんですね↑あのー★、飛行機とー。

A: →ううん。←

C: あ、飛行機とってー、部屋とってー、ホテルとって↑

A: そうそうそう。

(I類 女職場)

(10) は、親しい同僚同士の会話である。Aが旅行に行ったという話を聞き、その旅行はツアーで行ったのかという質問をしている。真偽疑問文の前は、質問命題に関係のある会話がされており、応答者が「ううん」と応答詞だけで応答したあと、質問者が立て続けに質問をし、正しい回答を引き出そうとしている。このように、相手への配慮をあまり気にしなくても良い時（家族や友人、職場の親しい者同士など）は、応答詞だけでも可能だが、改まった場面や、初対面など相手への配慮が必要な場合は、応答詞だけの応答はあまり好まれないと言える。

次の例は、配慮ある応答を期待されているにもかかわらず、応答詞のみで応答したことで、不十分な回答だと思われる例である。

(11) (謝恩会委員の学生と大学助手の話し合い)

大学助手: でいちよみんな今日、時間あるんですか↑、これから。

学生: いいえ。

大学助手: <笑い>皆さん、忙しいの。

学生: 3限授業です。

(I類 女職場)

(11) は、大学助手が謝恩会についての説明をし、これから謝恩会委員に作業に取り掛かってもらおうとしているところで、「今日、時間があるんですか」と質問をしている。しかし、学生は「いいえ」というだけであり、それに対して大学助手は笑って、「皆さん、忙しいの」と気遣いともとれる質問をしている。このように、否定することに対する後ろめたさや、大学助手という目上の人に対する配慮が感じられないと、相手との話に広がりを持たせたくない、謝恩会委員としてやる気がない、という印象を与えてしまう可能性があり、冷たい印象に受け取られてしまうかもしれない。

これらの例から、親しい間柄や相手への配慮を気にしなくてよい場合だとしても、I類の応答方法だと、「あなたとはコミュニケーションをとりたくない」「話す内容に興味がない」「やる気がない」などの印象を与えてしまう恐れがあるため、全体的にI類が極端に少なかったと考えられる。特に否定するときは、I類の応答方法よりも話し手聞き手が互いに相手への配慮が感じられる応答が好まれると考えられる。

5. 2 Ⅲ類：「いいえ」のない応答

この形式には、2つの対照的な用法が見られた。質問命題が応答者にとって的確な判断がしがたい内容のものと明らかに判断を下せるときのものである。否定か肯定かの判定基準とも言える応答詞がないために、1つの質問命題からどのように応答命題が導けるかが重要であり、またこのような形式を用いた背景を考えるのと同時に、1つ1つの会話文というより談話で分析することが重要である。

5. 2. 1 真偽を決め難い質問命題

Ⅲ類でのこの応答の特徴は、質問命題が応答者にとって真か偽かの判断を一言で言えるものではないために、応答詞では応じず、質問命題のニュアンスを少し変えて応答していることである。

(12) (陶芸教室に通っているという話で)

- 691 1：で、教室のようなところ？ (2：そうです) ああ、そうですか。(2：はい) じゃあその教室で勉強してらっしゃるっていう (ことですか)。
2：ああー勉強というか遊んでおります。

(Ⅲ類 コーパス)

(12) は、1が質問者で2は習い事の陶芸を話題として話している。質問命題に真か偽かの判断を下すというよりは違うニュアンスを含ませて応答している。「勉強しているか、勉強していないか」というより「遊び感覚で楽しんでいる」という表現に変えて応答している。次の(13)も質問命題に対して真か偽かの判断が明確に下せるような内容とはなっておらず、違うニュアンスに変えて否定応答している。

- (13) 916 1：はい、どうもありがとうございます。お芝居好きでいらっしゃいますか？
2：そうですねあの、(1：ああそうですかー) お芝居とか音楽とか。
1：よく、お出掛けになられますか？
2：うーん、最近はなかなか、(1：うん) ちょっと行く時間がなくて残念なんですけども、(1：うん) 機会があれば、(1：ああー) ええ。

(Ⅲ類 女コーパ)

このように質問者が尋ねる命題と応答者が応答したい命題の間に、ちょっとした違いがあり、否定はしたいけど応答詞を使ってまず初めに否定できない場合、少し情報を付加し、ニュアンスを変えて応答する。応答としては、否定になるが、咄嗟の質問だったり、すぐに答えられないような質問命題だと、「あー」「えー」「うーん」などの感動詞を伴って最終的には否定するパターンが多く、相手に否定と感じさせない効果があると考えられる。

5. 2. 2 手軽な応答

この応答形式には、「ありません」「だめ」「違う」「動詞+ない」という質問命題の真か偽かの重要な部分のみで応答している例も見られた。これは、ニュアンスの否定とは全く異なり、直接的で応答者が明らかな判断を下す時に用いていた。

(14) 9666 B: それいつ行くの、あした↑

A: きょう。

(Ⅲ類 男職場)

(14) は、図書館員B (女、40代) と同僚A (男、20代) の会話である。「あした」という質問の焦点部分を他の言葉「きょう」で置き換えている。同じ「日付」カテゴリの中から別のものを選んだだけ、ということがすぐに理解できるので、聞き手にとっても簡単に理解しやすいし、まず質問者が知りたい情報「あした、それとも違うほかの日なのか」という限られた中の選択のため、質問者もある程度、応答命題が想像できる。

(15) 350 Fア4: アーア ドウ ウデ アガツタ／

Fト4: アガラナイ／

(Ⅲ類 主婦)

(15) は主婦同士 (40代) の会話で、テニスクラブに入会した後、テニスが上達したかどうかを尋ねている。配慮よりも手軽さや早さを優先したい場合、(15) のような応答をしても質問者の許容内で、使用可能である。しかし、Ⅰ類の否定応答詞のみの「いいえ／うん」とⅡ類の述語否定のみの「あがらない」を比べると、どちらもあまり感情はなく、否定することに対する配慮はない。(15) の場合は、質問内容が応答者自身のことであり、相手に対する配慮というよりは、自分の能力に対する謙遜と捉える方が適している。このため、質問命題をそのまま否定の形にしても冷たさは感じられない。また、応答詞は終助詞やイントネーションをつけにくいのが、述語否定だと副詞や終助詞、イントネーションなど話し手の感情を付加させやすいので、(15) のようなタイプがあったとしてもⅠ類よりⅢ類が多くなったと考えられる。

5. 3 Ⅱ類: 「いいえ」を伴う応答

土屋 (1999) では、「いいえ系の感動詞⁽⁴⁾+そうじゃない」というように、感動詞が必ず後ろのコメントとペアをなしている」(p249)「他の感動詞はいずれも先行文の内容を受け止める機能を持っているのであるが、いいえ系は、その機能の上にさらに応答者からの情報発信の予告という機能を加えて持つ」(p248)とあり、肯定応答詞「はい」を用いて応答する場合、「はい、そうです」のみでも応答が完了しているが、否定応答詞を用いる場合は、「いいえ+そうじゃない」に、さらに応答者からの情報発信に進むコメントがあるということが述べられている。本調査結果でも、否定応答詞のみのⅠ類はごく少数であったが、応答詞に何か他の要素が付加されるⅡ類は、全体の約38%を占め、Ⅰ類の10倍以上もあった。つまり、肯定応答詞と違い、否定応答詞で応答する場合には情報を付加させることが多いことがわか

る。これは「5. 1 I類：「いいえ」のみの応答」の冒頭でも述べたとおり、相手に対する配慮が必要だからである。

これは日本語教育で教えられる一般的な形式であるが、本調査資料の質問者の質問命題からは、4つの用法が見られた。

5. 3. 1 客観的事実に関する質問

天気や規則、物事の真相についての質問に対して、応答者がその真偽判定を知っており、明確に判断が下せる場合に用いている。この質問に対する答えは、事実であるから相手に対する配慮はそれほど必要ではない。

(16) (教師同士の会話)

M：まあいいや、それでこの進路部の一、あのー1、2のプリントは一、生徒に配るんですか↑

A：いえ、★あの1、2は一保護者用です。

(II類 女職場)

(16)は、教師同士の会話である。プリントを生徒に配るのかという質問をしているが、Aはプリントが誰に配られるのか、そのプリントは誰のために用意されたのかという事情を知っており、その真偽は明らかである。

(17) (夫婦の会話)

Mイ5：台風ウ ダツ. テ コナイ ダロウ? /

Fア4：イエ ロクジ ノ テンキヨホウ ジヤ タイフウ クル. ツテ /

(II類 主婦)

(17)は、天気を話題にした夫婦の会話である。夫は「台風はこないだろう?」と台風が来ないことを期待して質問しているが、妻は天気予報から既に情報を得ており、間違いない情報内容を夫に与えている。

このように、もうすでに明らかとなっている事実、決まっていること、一般的に知られていることなど客観的事実に対する質問に対して、「いいえ」を伴う応答形式で応答している例が見られた。

5. 3. 2 同じ話題に関する質問

甲斐(1998)では、「話者は聞き手の持つ情報量を考慮しながら発話を行う」「話者と聞き手はともに、発話の進行にしたがって(中略)「情報ベース」という概念スペースを構築し、そのベーススペースを活用する」とある。この「情報ベース」とは談話の進行につれて設定される話し手と聞き手が共有する情報のことであり、話し手と聞き手はそれぞれ情報ベースに情報をインプットし、共有し、談話を進めていく。II類の応答の1つに、この「情報ベース」を活用した用法があるが、突然ある命題を質問として提示するのではなく、ある程度話題になっていることを命題とし、質問している。(18)は、質問者Aは大学教授(女)、応答

者Cも大学教授(男)で、その他の人も含め、複数人で講演会の打ち合わせをしている。

(18) 1486 G:そして司会が二人いらっしゃるんですから、一人が進行、して一人がコメント、なされるために、二人いるんだもの。ね。

A:うん。

D:@<笑い>

G:だってもう、そのための二人ですから。

A:そう。

D:ハッッ。

A:だからー、わたしが質問しますよ、質問なければ。ねっ、サクラで。

D:まああの一、つまりそうゆうこう、なんてんでしょね、あの一その討論に入ってからが寂しくなるといけないという考慮もあったので。

A:ええ。

D:じゃあー、[名字]先生、お願いできますか。@<笑い>

A:決めることもないと思うんだけどねえ。

I:討論の時は全部上に。

G:ん↑

I:全員いらっしゃる★###ね。

A:→全員いるわけ。←

I:討論の時は。

D:そうそう。

I:席は###。

A:そすると、わたしと[名字]先生もいるんですか、討論の時は。

C:いやあ、いらんないー。

(Ⅱ類 女職場)

Aは「そすると」とそれまで話題にしていた「講演会での討論中の立ち位置」についての話をまとめた上で、質問をし、Cは「いやあ」と応答詞を用いて答えている。Cはそれまで、発話はしなかったものの、情報ベースを共有していたために途中からの参加でも、このような応答形式になったと考えられる。この場面は、複数の会話参加者がいるため、質問者AがCに限定して聞いたわけではないことも考えられるが、仮にそうだとした場合、情報ベースを共有していたCにとっては、この応答形式での応答が可能である。

このように情報ベースにインプットされたベーススペースをうまく活用しながら生まれた質問命題は、質問者にとっても回答者にとっても、ある程度想定範囲内である。会話は、次に返される反応をある程度想定しながら自らの発話を選んで進めていくため、選んだ発話に対する反応が想定範囲内であれば、応答の事前準備ができていくことになる。そのため、真か偽かの判断がすぐに可能なため、応答の冒頭で「いいえ」などの応答詞がまず初めの応答として使われる。

5. 3. 3 応答者自身についての質問

応答者自身のこと、応答者の過去における事実、将来の予定などを質問された場合、これは当然応答者にはわかっていることであるため、質問命題が真か偽かすぐに判断することが可能である。したがって、応答の初めに応答詞を用いて述べることができる。

(19) 464 1：ああー、やっぱりね、すごいらしいですね。(2：えーふ)はあ。あのところで、あの、まあ、さっき、夏休み、(2：はい)で仕事、っていう話をしておりましたけれども、夏休みはどこかに、あの、時間を取っていらっやいますか？

2：いえ、こ、今年はどこにも、(1：ああ) 予定してません。

(Ⅱ類 コーパス)

5. 3. 4 相手を気遣う応答

これまでの用法の分類は、真偽疑問文の命題に着目し、どのような経緯から応答命題が導き出せるか、ということに着目していたが、Ⅱ類の4つ目の用法は、真偽疑問文の命題というより、応答者が聞き手に対しての気遣いで「いいえ」「いえ」などの否定応答詞を用いて応答する用法がある。

(20) (PTAの主婦の会話)

Fア4：ハイ／

Fへ4：ア モシモシ／

Fア4：ア オマタセ イタシ マシタ／

Fへ4：ドウモ

Fア4：ナン カ オデンワガ ナガカツタ ン ジヤ ナイ ハナシチュウガ
コチラノ／

Fへ4：イエ ダイジヨウブ デス／

(Ⅱ類 主婦)

(20)の質問者Fア4とFへ4は主婦であり、娘のPTAの役員である。Fへ4はFア4にPTAのことで電話をし、しばらく待たされており、Fア4は自分が別件で他の人と電話をしていたことを「長かったんじゃない」と尋ねている。その質問に対し、Fへ4は「いえ」と応答しているが、実際にFへ4が長い間待たされていたと感じていたとしても、このような応答をするのが、相手への配慮ということになる。特にこの2人の関係は、PTAの役員同士であり、相手に配慮ある姿勢を取ることは今後の関係を良好に保つためにも必要である。

質問者が不安になっていたり慌てている状況で、質問者がした行為について質問した場合、この応答形式を用いると、応答者はまず相手の心配や不安要素を打ち消して、安心させることができる。また、質問者側も、すばやく応答者の心情をくみとることが可能である。真偽を問題にするというよりは、儀礼的な応答とも考えられる。

6. 否定応答詞を中心とした分類のまとめ

以上、否定応答詞「いいえ」を中心に応答形式を3つに分類し、分析を行った。否定応答は、応答詞のみの感情のない応答形式より、終助詞やイントネーションを付加した述語部分で感情を表現したり、情報を加えたりすることで、否定することに対する配慮を表現できると考えられる。そのような点から、無機的なⅠ類よりⅡ類、そして、Ⅱ類より無機的な応答詞を取り払った形式のⅢ類が多く出現したと考えられる。

この3形式はいずれも、応答者自身が質問命題に対してどう対応しているかが重要である。Ⅰ類は出現数が極端に少なく、使用場面が限られる。特に、改まった場面や初対面など相手への配慮が必要な場合、この形式は好まれない。Ⅲ類は、1) 真偽を決め難い質問命題のため、異なる命題で応答するもの、2) 応答者自身が直接的に判断を下せるため、質問命題の真か偽かの重要な部分のみで応答しているもの、があり対照的であった。このⅢ類は応答者自身の心理的部分に関係していると考えられる。1) 質問命題と異なる命題で応答する場合は、質問者の命題では応答者は十分に応じられないため、応答者自身の別の表現に変えて応答したということであり、2) 真か偽かの重要な部分のみで応答する、というのも応答者のその状況での明らかな判断であったり、配慮よりも手軽さを優先させたい場合に用いられているからである。一方、Ⅱ類は、1) 客観的事実に対する質問、2) 情報ベース内で共有した情報に関する質問、3) 応答者自身に関する質問、4) 質問者に対する配慮を表す時に使われていた。これらは、単なる事実や相手に対する儀礼的な気遣いを述べる時に使われると考えられる。その点で、Ⅲ類の応答者自身の心理的部分とは少し異なる。

真偽疑問文に対するⅡ類、Ⅲ類の応答方法は、文法的には間違っていないが、教科書通りでは、実際に学習者が使う場合には不適切で、相手に誤解を招く可能性もある。従って、初級段階でも場面設定に配慮したバリエーションのある応答形式を学ぶ必要があると考えられる。

7. 今後の課題

今回の調査が否定応答の全てを明らかにできたわけではないが、母語話者間の否定応答形式の使用実態が分かったことは、大きな発見であると言える。しかし、真偽疑問文の命題に着目して分析したものの、Ⅲ類の2)「手軽な応答」は、応答者の謙遜で使われていたり、同じカテゴリー内から別のものを選択する、という分析結果になってしまい、質問文自体の分析に踏み込めなかった。そのため、今後は真偽疑問文自体の種類に着目し、応答形式と繋げてさらに研究を進める必要がある。また、応答詞に続くそれ以下の応答にはどのような応答方法があるのか、具体的に分析し、さらに真偽疑問文に対する否定応答を明らかにしていきたい。

注

- (1) なお、真偽疑問文であっても聞き返しや聞き流している場合、質問の途中で応答者が答えて質問の命題部分が明確でない場合は数にに入れていない。
- (2) 本調査では、6つの資料を調査対象としたが、時間の関係で『筑波大学砂川研究室話し言葉コーパス』だけ、一部の調査となっている。
- (3) 表2は大浜(2004)の表を抜粋したものである。よって、表2の資料1～3は本調査とは関係のないものである。
- (4) 土屋(1999)では、「いいえ」「うん」「いや」「いえ」などの感動詞をまとめて、「いいえ系の感動詞」と呼んでいる。

参考文献

- 上村隆一(1987)「Yes-No 疑問文に対する応答一日英比較の立場から」小泉保教授還暦退官記念論文集編集委員会(編)『言語学の視界』大学書林
- 内田安伊子(2009)「判定質問に対する返答—その形式と意味を結ぶ談話規則と推論—」ひつじ書房
- 大浜るい子(2004)「日本語の自然会話における真偽疑問文と応答詞「はい」の関係について」『日本語教育』123号
- 奥津敬一郎(1989)「応答詞「はい」と「いいえ」の機能」『日本語学』(8) 明治書院
- 甲斐ますみ(1998)「発話における省略とその解釈」『世界の日本語教育』(8) 独立行政法人国際交流基金
- 工藤真由美(2000)「否定の表現」仁田義雄・益岡隆志『時・否定と取り立て』岩波書店
- 小早川麻衣子(2006)「初級日本語教科書に現れた応答詞—「いいえ」系応答詞の提示にみる問題点—」『日本語教育』130号
- スコット・サフト・大原由美子(1999)「日本語における否定的返答とコンテキストについて」『言語学と日本語教育』くろしお出版
- スリーエーネットワーク「みんなの日本語初級I本冊」(2005)
- 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会(編)『文法と音声』くろしお出版
- 富樫純一(2006)「否定応答表現「いいえ」「いえ」「いや」」矢澤真人・橋本修『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』ひつじ書房
- 中島悦子(2001)「自然談話における応答詞の使い分け—「はい」と「うん」、「いいえ」と「うん」—」『国士館短期大学紀要』第26号 国士館短期大学人文学会